

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷十三第

行發日一月六年九和昭

論叢

不動産の登録税に就きて……………法學博士 神戸正雄
新勞銀基金說について……………文學博士 高田保馬

時論

現今の思想問題……………經濟學博士 作田莊一
滿洲問題と國民主義……………經濟學博士 石川興二

研究

生産増加と貨幣需要……………經濟學士 中谷實
北海道釀定置漁業に於ける漁場動員……………經濟學士 岡本清造
景氣觀測について……………經濟學士 祭原光太郎

說苑

定航海備船契約に於ける特約條項……………經濟學士 佐波宣平
百貨店出張販賣の本質……………經濟學士 堀新一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十八卷總目錄

(禁轉載)

滿洲問題と國民主義

石 川 興 一

凡そ一國について考察せんとせば、その國の自然と人間と文化とに接しその國民の生命を具體的に體驗することが極めて必要である。歐米滿三年の生活によりギリシヤ、スペインに至るまで西歐文化國を體驗し得た自分は、反つて東洋の諸國に接する機會なきを遺憾とした。然るに今度、北支、滿洲、朝鮮の自然と文化に接し人々と相語るの機會を得た。この一文はその體驗と思索の一端を、自分の主張せんとする『實踐的國民主義』の立場に於て纏め、以て將來の研究の出發點となさんとすものである。

滿洲の現存在に於ける根本的な特徴は、日本的な文化要素と支那的な文化要素とが直接的な接觸に於てあることである。先づ國家と社會との關係について見るに、滿洲の社會に於て支配的なものは支那的要素であるが、滿洲の國家に於て支配的なものは日本的要素である。滿洲の現存在は先づかゝる社會と國家との關係として把握されねばならない。かくて滿洲の現存在を具體的に體驗せんとせば、支那的な社會を具體的に體驗することを要する。而もこのことは支那に於て支那の國家との關係に於てなされねばならない。またかくて支那的な國家を體驗理解することは、同時にそれとの對照に於て日本的なる國家を我々日本人をして十分に體驗せしめることとなる。而して滿洲を構成せる支那的なものは主として北支的要素なるが故にこれを體驗せん

1) 拙著改訂四版『精神科學的經濟學の基礎問題—國民主義經濟學の基本的研究』補論「現代に於ける國民主義の意義」參照

がために先づ白河を溯つて北京(北平)に向つた。

白河の兩岸は廣漠たる平野である。そこに點在する農村の土塊に等しい民屋は先づ我々の關心を引いた。即ちそれは高梁の莖を束ねたものを材となしこれに泥土を塗つたものに過ぎない。蓋し自分が世界に於て見た民屋中最も貧弱なものである。そこに見る人々の生活も同様に亦極めて原始的なものであつた。

然るに壯大な城壁を通過して北京に着き先づ王宮に至つた時、我々はその雄大壯麗なる輪奐の美に啞然として心を奪はれた。誠に世界何れの王宮と雖もこれに及ぶものはない。而もこの王宮の内部を充す金銀珠玉の財寶は無數であつて見る者をして遂に倦怠を覺えしむるまでである。萬壽山、天壇等北京とその郊外に於て我々の接した王宮文化は何れも雄大壯麗を以て我々を驚かしたのである。然し翻つて白河々岸の土塊に等しき民屋を思ふ時、轉感慨に堪えない。一國の内に於て目撃したところのこのあまりにも甚だしい對立は一體何を物語るであらう。

かく考へ來る時、これ等の王宮文化は結局その效果より云へば民衆に對する威嚇文化であり、その成立より云へば民衆に對する榨取文化である。即ち王室はその王位を保つ爲めに、その宮殿をかくも壯大にして民を威嚇することを必要としたのである。而もその莫大なる費用は民より榨取されねばならない。この榨取は宮殿を壯大にし民を威壓すると共にまた民を叛逆に對して無力ならしめるところのものである。

然らば何故にかく民を威嚇し搾取する必要があつたか。その原因は王朝の變遷と云ふことに求められざるを得ない。即ち新に來つた王朝は他なるものとして民に望むのである。そこには何等内的な結合關係はない。民を威嚇し搾取すると云ふことはこの外來者にとつて王位を保つ必要手段である。王朝が一度代替すると云ふことは、恰も山坂に石が轉じ始めたか如く、そこには王朝變遷の無限の可能性が生ずる。故にそれはまた處女性の喪失にも譬へ得る。而して新に交替し來れる王朝は自ら先朝の造營を破壊し更に壯大なる造營を以て民に臨むこととなる。かくて支那に於ける王室と人民との關係は敵對關係である。この支那との對照に於て我々はこれと全く相反する關係を日本に見ざるを得ない。即ちそこに於ては皇室は萬世一系である。故に日本に於ける皇室と人民との關係は、支那に於けるが如く他なるものゝ對立ではなく、同根よりの發展であり従つて本質上内面的に結びつけられて居るところのものである。故に兩者の關係は支那に於けるが如き威嚇的なものではなく、本質的に愛である。従つてまた王宮は、支那に於けるが如き威嚇文化たり搾取文化たることを必要としない。むしろそれと全く反對なことが仁徳天皇の民の竈の物語りに於ても明治大帝等の御聖徳によつても物語られて居る。而してこゝにまた支那に於ける國家と社會との關係が日本に於ける國家と社會との關係と全く異なる所以があるのである。

これ等の問題を更に考察するに當り我々が日本人として體驗し思索したこれ等の點に關し、北京に於て訪問したところの現代支那の代表的學者胡適氏が支那人としての體驗と思索とより述べ

て居るところを知ることが有益であろう。

即ち胡適氏を訪ねて支那の現代社會問題について尋ねた時、氏は日支の事情を對比せしめて論じ、それに關する一論文を我々に贈った。それは英文にて書かれたものであつて Types of cultural response (文化的應答の型)と題するものであつた。¹⁾この論文に於て氏は西洋文明の攝取についての日本の速なる成功と支那の不成功とを先づ對照せしめ、この相異なる事情を決定する要因を兩國の歴史的文化的地盤 historical cultural background の比較に於て求め而して文明攝取についての日本の型と支那の型とを明にせんと試みて居るのである。氏は近年日本へ來遊したこともある今日の滿洲の問題は支那的社會への新文化の攝取の問題でもあるが故に、この點よりするも胡適氏のこの論文は教へるところが少なくない。以下先づこの論文の要旨を述べまた幾分自己の考をも述べて見よう。

氏は混沌たる現代支那の社會狀態を西洋文明の攝取に關聯せる問題として把握してゐる。即ち氏はその論文の冒頭に於て曰く「支那の問題は、一見如何に多様且つ複雑に見へようとも、實際に於ては文化的鬭争並に支配の問題である。古き文明がそれ自身の意志に反して、西方の新しき文明との日々密接な接觸を強ひられたところの情勢に於て、如何に満足なる調整を齎すべきかの問題である。そこに於ては古き文明が國民的存立 (National existence) 經濟的壓迫、社會的並に政治的混亂並に智的混亂無政府狀態の逼迫せる諸問題の解決に望なく不十分なることを明にし

1) 氏が我々に與へたところのものは The Chinese social & political science Review Vol. XVIII, No. 4, 1934 であつた以下引用する頁數はこの Review の頁數による。但し以下圈點は余の附するところである。

た。而してそこに於てはこれまで決して十分に理解せられ説明されなかつた理由の爲めに新らしく入つて來た文明が自分を傳來の文化に接することに於てもまた新なる文化的均衡を作り出す地盤又は酵母として廣く採用され同化されることに於ても未だ成功しなかつた¹⁾と述べて居る。西洋に始まりそこから東方と西方とに向つて進み行き、總ての地方を征服し遂に極東に於て相會したところの新文明による世界征服の偉大なる脚本はこゝに最後の場面に倒達した。この極東に於て西洋文明は東洋文明の主要なる二中心即ち支那の大陸帝國と日本の島帝國とに直接接觸し衝突した。而もこの西洋文明に對する日本の反應の仕方と支那の反應の仕方とは根本的に異なる。日本に於ては西洋化が非常な速度と熱意とを以てなされ、半世紀の短き間に於てそれに熟達したのみならず今や工業並に商業的膨脹に於て、陸軍並に海軍的拮抗に於て西洋諸國を恐れしめて居る。他方支那は無効な抵抗、躊躇、改革の痙攣的な斷續的な試、革命の戰爭、内部的抗爭に於て一世紀以上を浪費した。今日支那は、一度偉大であつた國民が再び自立せんと助けなくもがいて居り而して抵抗し難き西洋文明の衝突により作り出され複雑にされた數多い逼迫せる諸問題の解決に對して方法と手段とを絶望的に探つて居るのである。

胡適氏は更に進んで、相似たる文化的接觸に於て兩國民をかへの如き對照的な事情にもたらしたところの條件、又は要因 factors—その存在が日本の速なる成功を、而してその存在せざることが支那の失敗を説明するところの條件又は要因は何であるか。と問ふて居る。而して曰く、

この問題に對する普通の説明即ち自身の文明と似た文明を知らなかつた支那は西洋文明の強制的侵入に對して尊大であつたが、外國文化を屢々取り入れ來つた日本は西洋文明に對しても良く準備されて居たと云ふ説明は當らない。この説明は、支那に於て西方より傳來せる佛敎が二千年の長き間宗教道德の三大國民的體系の一となつたことを、また日本が早く基督教を禁壓し固く鎖國をして西洋文明に對して強き對抗をなしたことを、更に明治維新に於て尊王攘夷が合言葉とされたことを説明し得ないと述べて居る。

かくて日本の西洋化の成功に最も本質的に效獻した三つの要因を擧げて居る。即ちその第一は改革又は現代化の爲めの運動の偉大なる指導者が總てそれから出て來たところの有力なる支配者階級の存在せしこと *the existence of a powerful ruling class* である。文化の接觸支配に於ける第一の問題は何人がこの支配を爲すかと云ふことであるが、日本に於ては大名並に武士なる非常に有力な支配者階級があつてこの問題に直に答へた。明治初年の優れた政治家はこの階級の人であつた。岩倉、三條は貴族であつたが、伊藤、山縣、木戸、井上は長州藩の武士であり、西郷及大久保は薩摩藩の武士侍であり、板垣、大隈は土佐と肥前との侍であつた。その指導が有力であり效果的であつた所以は彼等が、人民によつて尊敬されるところの、而して天皇の支持を得て、*with the support of the emperor* 彼等の政策を效果的實行に齎らす爲めの殆んど終局的權力を有するところの政治階級に屬して居たが故である。然るにこれに反し支那に於てはかくの如き有力な指導

が全々、totally lacking して居た。支那には普通の人民の地位に移されることなしに長い間續くことの出來た世襲的貴族なるものはなかつた。皇室と共に皇族はあつたが王朝の争によりまた社會的水平化 social leveling の過程によつて週期的に一掃された。國民的危機に際して重要な役割を演じ傑出したところの偉大な諸指導者はあつたが、絶對的王政の下に於ては、これ等の政治家は彼等の仕事を爲す力と機會との爲めに皇帝の好意と信任に頼らなければならなかつた。彼等の仕事は氣紛れな不氣嫌によつて又は新たな皇帝の繼承によつて容易に没落する。西洋文明の亞細亞大陸への進出は阻み得ないこと並にその文化が幾多の點に於て秀れて居ることを明に知つたところの先見の明あり智能ある多くの人々が、十九世紀の半より最近時に至るまで居つた。これ等の人は、必要なる變革を實行する力を有する人々に影響を與へるべく試み書きまた教へた。然しこれ等智能ある人々自身は何事も大仕掛にする力を持つて居なかつた。これ等の人も日本に生れて居たならば、伊藤大久保等の人の様になることが出來たであらう。而して「社會的構造の如何なる層に於ても有力な有能な指導力が存して居ないならば、革命の長い骨の折れる道行きより外に國民の現代化への近道はない¹⁾」

第二の要因は、日本のこの支配階級が特權を有し高く訓練されたる軍人階級であつたと云ふことである。この西洋文明を以て侵入し來れる列強に對して國民的存立を確保するに最も重要であり他の東洋諸國民がそれを習得するに最も困難を感じたところの西洋文明の一つの特殊な面―即

ち西方の科學的技術的產業的文明の背後にあるところの陸軍並に海軍の力の面、を日本をして容易に採用することを可能ならしめたところのものはこの事實である、支那に於ては政治的社會的文化的諸事情が軍人を輕視せしめ従つてまた軍人の質が劣等であるが、日本に於ては侍の教育は徹底的あり、それは幼少より初められ、武術のみならず智的道德的宗教的教養の嚴確なる體系をも含んで居た。侍は武士道によつて民衆よりの尊敬に價した。上の好むところ下これを教ふた。この軍事精神は新しき武器と戰術を待つて容易に現代的軍隊となつたのである。

第三の要因として胡適氏の擧げたところのものは、日本の皇室についてである。「千年以上に亘る日本の特殊な政治的發展は新政治構成に對する適切な安定的な土臺を日本に與へた。この土臺は混亂と革命の可能性を包含して居るところの當時の事情の下にも拘らず變革の總ての運動に對する確乎たる重心として役立ち確たる繼續的な進歩を可能ならしめた。」¹⁾ 殆んど千二百年の間政治の表面に立たなかつた皇室は、此政治的改革に際して「國民の獻身と崇拜の眞の源泉」と成つた。「知られない古よりのその神聖なる由來を有する……この王朝は今日まで世界の最も確乎たる君主國であつたが將來もそうであらう。」²⁾ 然し左様な幸運は支那の政治的發展を決して惠まなかつた。當時支那を支配して居た王朝は十七世紀に支那に來た外來民族であつた。而して十九世紀までには最高の權力の醜酌と奢侈の長き期間によつて既に甚しく弱められて居た。³⁾ 「秩序あり、繼續的な改革は、その周圍に分離的個人的な諸努力が中心し、堆積し、持續的全體へと永續せしめら

1) P. 533.
2) 3) P. 545.
4) P.P. 545-6

れたところの重心として核としての安定せる政治的秩序に必然的に依存しなければならない。如何なる仕事に於ても進歩は、過去の仕事の上に現在の努力と改善とを繼續的に堆積することを意味する。かゝる進歩は持繼を保證する政治的安定のないところに於ては不可能である。これなくしては將來への計畫もあり得ない、而して個人的の仕事は大きな政治的出來事によつて破棄せられ破壊せられる¹⁾かゝて「支那の文化的調整は、遅々として瘡癩的、非聯繼的、浪費的である様に運命づけられた²⁾」と述べて居る。

胡適氏はその結論に於て以上の論を一般化し曰く、各國の文化調節には其國の歴史的背景の相異なるに従つて、相異なる型が成立つ。「各の型はそれ自身の歴史的背景の光に於てのみ理解し得るものである³⁾」と論じて居る。而して日本の型を以て the type of centralized control 中心的支配の型であるとして居る。曰く「日本に於て現代化の此七十年間に起つたことは、我々が中心的支配の型と呼ぶところの一の特定の型を示めずに過ぎない。國民的範圍の改革と云ふ巨大な仕事に於けるかくの如き秩序あり有效なる進歩は、上述せし特殊の事情の下に於てのみ可能である⁴⁾」と述べて居る。

かく胡適氏が日本の國民的改革について一般的に中心的支配の型なるものを立てたことは適切である。胡適氏が西洋文明攝取に於ける日本の速なる成功と支那の失敗の要因として擧げたところのものも結局第三の要因即ち國民生活の不變なる中心點としての皇室の日本に於ける存在と支

1) P. 540.
2) P. 548.
3) P. 549.
4) P. 549-550.

那に於ける不存在とに歸して考へることが出来る。即ち氏が要因の第一として擧げたところの有力なる爲政者階級の存在と云ふことも氏自身の説明に於けるが如く結局有能者がそれに結ばつて有力に働き得る皇室なるものが日本に於ては存在し支那に於ては存在しなかつたからである。要因の第二として擧げられた武的精神も日本に於ては單なる武ではなく皇室を中心とせる愛國心に發するものと考へらるべきが故である。これに反して支那にはかゝる愛の統一點がないのである。ひとり明治維新のみならず大化の改新も同様に皇室を中心として行はれた。加之藤原氏並に將軍が千二百年に渡つて政治の實權を掌握したと氏が云ふところのものも、この皇室中心主義の一の場合たるに外ならない。即ちこれ等のものが有力であつたこと自身が皇室に結ばつて居たが故である。即ち藤原氏は皇室の姻戚として、將軍は天皇より任命されたる征夷大將軍として、政治の實權を有したのである。それ故若しそれが支那に於てであるならば、實力あるものが王位を奪ふことになるであらうが、この事情は日本に於ては全く異なるのである。かくて皇室が日本の國民生活の中心であると云ふことは日本の歴史を貫く根本的な型であると云ふことが出来る。而して胡適氏が云ふところの變革期に於ける中心的支配の型なるものは、この根本型の變革期に於ける現れたるにすぎないと考へることが出来る。

これに反して胡適氏は支那の文化調節の型を以て the type of diffused penetration 分散的徹底の型であるとして居る。即ちそこには國民生活を貫く中心としての皇室が存在せざるが故に、國

權が確立せず、國家の活動が重をなさなかつた。従つて一切が社會によつて分散的になされなければならなかつたのである。但しこゝに氏が分散的徹底とした點については更に後に批判することとする。

かく國民生活の不動の中心としての皇室が日本に於ては存在し支那に於ては存在しなかつたと云ふことは、社會變革期に於ける兩國の構造を「中心的支配」の型と分散的の型とに異ならしむるのみならずまた一切の國民生活の色調を異ならしむるのである。兩國に於ける君主と臣民との關係、國家と社會との關係も既に述べし如くまたこの點を中心として考へられなければならない。

即ち支那に於ては王朝は絶へず交替し外的なるものとして人民に望んだのである。故にその關係は本質的に敵對的である。然るに日本に於ては君主は萬世一系であり君主と人民とは相共に發展し來つたのである。故にそれは本質的に内面的に結ばれて居るのである。明治大帝が『維新の詔』に於て「今般朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば今日の事朕自身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立ち古列祖の盡させ給ひし蹤を履み治蹟を勤めてこそ始めて天職を奉じて億兆の君たるに背かざるべし」と宣されたは、日本の皇室精神を表現されたところのものである。これに反して支那に於ては、諺に「山高皇帝遠」と云はれて皇帝は人民の生活に無縁なものとせられて居る。加之その豪華な生活により名利の戦により絶へず人民を榨取し苦しめつゝあるものである。日本の皇室が民の親として常に民の生活の爲めに意圖されるとは全く

1) 拙稿『變革期の社會政』本誌昭和七年八月號第四七頁以下參照

異なるのである。

これに従つて支那に於ける國家と日本に於ける國家とはその本質を全く異にする。古くアリス・トテレスは善なる國家は被支配者のために政治をなすところのものであり、惡なる國家は爲政者のために政治をなすところのものであると云ふたが、この二者の對立が正に支那と日本との間に於て見られる。私が支那の官吏である人について墮胎間引き等私生活の犯罪について尋ねた時、その人は支那の社會は今そんな小さなことについて考へてゐることは出來ない。支那は社會の四大惡に惱まされそを専ら問題にしてゐるのである。而してこの四大惡とは官吏、軍閥、財閥、土匪であると物語つた。即ち國權の發動に直接當たつてゐる官吏と軍閥が土匪等と共に社會の最大惡を成すと云ふことは、その國家が如何に人民の生活に對立せるものであるかを表はす。「昇官發財」と云ふ語が諺となつて居るが如く、高い官吏になるに従つて益々人民を搾取して私財を積むものとされて居る。軍人についても「良い鐵は釘にされぬ、よき男子は軍人にならぬ¹⁾」と云ふ諺の様に軍人なるものは凡て質の劣れる者であつて土匪とあまり異ならない人々である。殊に軍閥は種々なる仕方にて非常に人民を搾取し苦しめつゝある。これに反して日本の官吏と軍人とは國權の發動に當るものとして最も眞面目な社會階級に屬する。日本の國家は私が「國民愛を原理とする國民主義國家²⁾」に歴史上最も近い國家である。

日支に於て國家がかくの如く相異なるが故にその下にある社會もまた異ならざるを得ない。支

1)

2)

P. 549 拙著「精神科學的經濟學の基礎問題」(改訂四版)補論「現代に於ける國民主義の意義」參照

那の社會は國家を信頼し得ないが故に、極めて自力的である。治安についても都市が自ら城壁を作つて守るのみならず村落の豪農は自分の家に望樓をかまへ銃眼を作つて自分で防禦している。かゝる社會に於ては自ら郷土觀念が強く郷土團體が發達して居る。人々は門札名刺等にも出身地を記してゐる。郷土會館も方々に立てられて居る。また血縁關係も強く大家族制度が今尙ほ存し同族の關係が強い。かくて村落に於て部落團體が發達して居ると共にまた都市に於ては職業團體が強く従業員數の制限、價格の統一等の經濟的の働きのみならず諸種の自衛の働をも營んで居る。これに反し國家に恵まれて居る日本人に於ては、これ等のものは國民的單位にまでの發達によつて解消され、國民的結成力は強いが、かくの如き社會的團結力は遙に弱い。また國家に恵まれなかつた支那人は個人として非常にねばり強いが、日本人は國家をはなれると弱い。支那滿洲の諸都市に於て日本商人が支那商人との競争に於て次第に壓迫されて行つたこともこれを物語るものである。

二

胡適氏が西洋文明攝取の支那の型を the type of diffused penetration 分散的徹底の型としたことは前述せしところである。而して國家的中心の確立せる日本の攝取の長所は速であるがその短所は國家によつて人民の自發によらざるが故に不徹底的ある。然るに國家的中心の確立なき支那の攝取の短所は遅延と浪費であるが、長所は社會の人々の自發性によるが故に徹底的なることで

あると氏は論じて居る。

然し今日の支那はその文明攝取の型が「分散的徹底」であるとして晏如として居ることが出来るであらうが。その遅延と浪費の行はれて居る間に世界列強はその攝取發展せしめたる經濟的軍事的諸力を以て今や、支那に迫り來り、胡適氏自身も認めて居るが如く、國民的存立の逼迫せる問題を惹起して居る。國際管理國際分割の危機は日々支那の上に迫りつゝある。或る人々は支那がかゝる状態に進むことを意としない様であるが、若しくなつた場合その東洋に及す結果がどうなるかを先づ考へて見なければならぬ。印度をまで完全にその手に收めた白人の侵略が支那をも席卷するならば、この飽なき白人の壓迫に對して抵抗し得る亞細亞の唯一の國は一島帝國日本あるのみである。かくて日本が永く安全な存立を保ち得る筈はない。その結果は有色人種に對する完全なる隸屬を齎らすこととならう。かくて日本は日本自身の存立の爲めにも有色人種全體の存立の爲めにも、支那の保全を先づ確保しなければならぬ。

日本は只だ自己の存續を確保するのみならず更に進んで今日の國內的並に國際的な資本主義的段階より余の所謂國民主義的段階への發展を指導すべき世界史的使命を有して居る。即ち「國民主義の立場に於ては、國民社會の内部に向つてその成員たる各個人の個性の完成を果げしめ、以て最も豊なる一國民文化を創造するにあるが如く、また國民社會相互の關係に於ても各國民人格を相互に尊重し、各國民人格の特徴を十分に發展せしめ合ひ以て最も豊富なる世界文化を生成創造

1) 本誌本號第六六頁參照

せんとするのである。而して國民主義は内に於て國民主義社會の實現に努力すると共に同時に外に向つて國民主義的國際社會の實現に努力するのである。¹⁾日本は有色人種に於ける唯一の完全なる獨立國として先づ支那の獨立を確保し進んで亞細亞の諸民族を解放し以てその國民主義的、世界使命を遂行しなければならない。

而も支那を確保すると云ふことは一刻も速に支那に強き正しき國家權力を確立すると云ふことである。而も胡適氏も云へるが如きその長き歴史的背景の規定によつて制約されて居る現代支那に於て、かゝる國權の急速なる確立を期待し得るであらうか。若しこのことが支那自身の自力に遑に望め得ずその國民的存立の危機が加はるとすれば地理的人種的に支那と眞の利害を一にする日本がその長所とする國家的要素に於てこれを援助しなければならぬ。而して支那の保全に對して有害なる白人の干涉を先づ排除しなければならぬ。日本が滿洲國の國家的活動を援助すると云ふこともその眞劍なる國民主義的世界使命に發するところのものでなくてはならない。従つてこゝに日本國と滿洲國との關係の根本的意義がなければならぬ。それ故にそれは、資本主義の成立段階に於て諸國が亞細亞の諸國を侵したとは全く異なる態度を以てされなければならぬ。万一今日の日本が、嘗て英國が印度を經營せし如き精神に於て滿洲に臨むならば、それは自らの墓穴を掘る結果とならざるを得ないのである。

日本が國民主義的態度を以て、滿洲に徹する時、そこに自ら日本の國防の安固も經濟的發展も

1) 前掲拙著第四八二頁以下參照

本質的に含まれてゐるのである。日本の國防と滿洲の國防との關係を問題とする時、人々は多く軍用資源について語る。然しこれにもまして重要な問題は、日本が萬一他國と戦はねばならぬに至つた時、滿洲國人が精神的に日本と一致團結して居ると云ふことである。今日一部の人が憂ひて居るが如く、萬一かゝる場合に廣大な滿洲の地に反日的動搖が起るが如きことがあればそれが日本國民に對する精神的打撃となり反對にそれが敵國に對する精神的援助となることは少なくないのである。かゝる憂を全くなからしむると云ふことは、日本が日頃より國民主義的誠意をもつて滿洲の人民の眞の幸福を意圖すると云ふことに存するのである。

またかゝる日本の國民主義的態度の中に自ら日本の經濟的發展もあるのである。即ちかゝる安固なる世界に向つてこそ日本の投資もこれを思ひ切つてすることが出來其自然富源をも活用することが出來るのである。また滿洲の民衆の眞の利益が意圖せられ民衆の今日極めて低い生活狀態が高められるならばそこに自ら日本の生産に對する大きな場面が開拓されることとなる。

かくて日本の滿洲に對する國民主義的努力の中にのみ日本の國防の眞の安固も經濟的の眞の發展も自ら求め得られるのである。これに反して日本が目前の利害に心を奪はれ滿洲民衆の眞の生活を輕する如きことあれば日本の國防の安固も經濟的の眞の發展も永遠に失はれることとなり得るのである。洵に遠慮なきものは近憂ありである。滿洲に於て見聞せし事件は、我々をしてこのことを痛切に體驗せしめた。而してこのことは滿洲以外の東洋諸國に對する場合に於て全く同様

である。

三

かくの如くに日本が滿洲に向つて眞劍に國民主義的に働きかけると云ふことは然らば如何にして可能であらうか。それは先づ第一に日本の國民主義的國家精神を以て滿洲國を援助する爲めに滿洲官吏として働く日本人として秀れたる人々を送ることである。

滿洲國の官吏の構成に於て特に我々の心を引いたものは、縣參事の制度でありまた縣參事たる人々の人物であつた。それ等の人々は日本の大學又は専門學校卒業生より選ばれて滿洲國官吏としての人材養成機關である大同學院を卒業したのであつた。これ等の人々は邊陲の地に入つて民衆と生活を共にし身命を堵して民衆の生活の爲めに努力し「縣長」の下にあつて事實上縣の實權を握つて居る。大同學院の前身である自治指導部及び資政局の爲めに力を注いだ笠木良明氏は、「滿洲國縣參事官制度の重要性」なる論文¹⁾に於て「滿洲建國の事業に於て私は……此制度が最も重要な土臺の一つだと信じて居る」と述べ、また「あちらの人は人を觀る眼が敏い。善良な仁、徳のある仁と見て取れば絶対に信賴して來る。」と述べて居るが、所謂支那通滿洲通を以て自任する人々が往々支那人は壓迫しなければならぬと主張ことの如何に誤つて居たかは、今日深く反省すべきところの事件がこれを實證して居る。今日まで日本人は滿洲に對してあまりに物的關心をもつて對しその民衆の生活を輕んじなかつたであらうか。今日の滿洲は深き反省に基きこの態

1) 昭和八年改造六月號

度を轉換すべき時期に際會して居る。縣參事の人々はこの滿洲に於て最も親しく民衆に接し大理想に基いて眞に民衆の爲めを計りかくすることによつて未通つた日本の爲めを眞に計らんとして居る。されば過日開催された全國縣參事會議に於けるこれ等の人々の眞摯な態度と眞面目なる言論は中央政府其他の人々に深い感動を與へたのである。

滿洲官吏の構成に於て正にこれと反對に我々の心を暗くするところのものがある。それは滿洲問題に特別の理解なき所謂「古手官吏」の滿洲入りである。彼等は更に内地より昔日の屬僚を招き部下となし昔ながらの官僚主義を發揮しつゝあるとのことである。今や五つの省を廢し十四の道が置れんとして居る様であるが、この道の長にまた／＼日本より古手官吏が選ばれんとしていることを心ある多くの人々は憂ひて居た。而も中央政府の年長官吏の中にもよく滿洲問題を眞劍に理解し參事官を眞に重んじて居る人々も少なくない。縣參事諸氏が眞に心を一にしましたこれ等年長の人々がこれを擁護して強く正しく進むならば、官吏構成の改善は疑ひなく行れるであらう。

かくして高められたる官吏によつて國民主義的理想を實行しなければならぬのであるが、それには先づ農民の生活を土匪等の不安より安全にすると共に農民の生活を高めねばならない。支那的社會の民衆の生活が如何に底いかは前述せし如くであるが、更に滿洲事變以後偶然にも農産物の價格の下落が始まり今日は益々安く生産費も償はない有様である。この農産物の中最も重要なものは大豆であるが、この仲買に當つて居る「料棧」なるものは金融資本家と結んで農民を搾

取しつゝある。

かゝる状態の改善に先づ努力が向けられなければならないがこれが爲めには前述せし支那的社會の長所たる自力性と従つて農村の部落團體の發達性が活用されねばならぬ。即ちこの部落を地盤とし組合制度を發達せしめ、これを縣の聯合、道の聯合更に國民的聯合にまで結成することが重要である。これがために國家は十分なる力を用ゐなければならぬ。この組合の力と國家の力が協同すると云ふことが總の問題にとつて甚だ重要である。²⁾先づ農産物の販賣にも必要である。更に大豆の問題も日本に於ける米の問題の如く結局國家的專賣に至らなければ解決出来ないであらうが、この國家的專賣はその農産物の生産統制を行ひ得なければならぬ。而してかゝる生産統制も組合を通じてのみ始めて十分に行ふことが出来るのである。また今日一般に行はれ居る粗放的原始的な農法もかゝる組合を通じて國家が生産指導を有效になすことが出来るであらう。かくて生産力が増大すれば一家を支へるに必要な農地は自ら今日より小となり勞力も減少するであらう。かくて農地の餘裕が増加すれば日本よりの移民も一層無理なく行はれ得ることとなる。またかくて生活の餘裕が出来れば、生活も高まりそこに日本の製品に對する市場も自ら次第に發達して来る。またかくて生活の餘裕が出来れば普通教育を受けしめることも出来る様になる。或人は滿洲の民衆を教育することを有害無益と考へる傾がある様であるがこれは思はざるも甚しい。即ちそれは英國が印度に對するが如き利己主義的な搾取政治を行はんとする時に云ひ得

1) 農村共同體を確立し個人を單位とする資本主義社會より農村共同體を
かくて農村共同體へ進まねばならない。本誌第三十六卷第一號拙稿參照
2) 單位とする國民共同體へ進まねばならない。本誌第三十六卷第一號拙稿參照
この點についても今日朝鮮に於いて成功しつゝある『金融組合』は教
ふるべきが多い。

ることである。日本が眞面目に國民主義の立場に立つてその政治に協力する以上、この民衆が教育され自覺的となる程彼等はかゝる善政を支那の國家の下に於ても受け得なかつたしまた他の白人の下に於て受け得ないことを一層明に知り種々なる惡宣傳にも動かされぬ様になるであらう。而してこのことは滿洲國の確立並にその日本との友和の確乎たる根柢をなすのである。また滿洲の大平原に單に鐵道のみならず立派な道路網が完成されることを要する。かくて農産物の生産費も減少し總ての生活の進歩が一層期待され得るのである。其他なさるべきことは多いが、要するに眞の國民主義的精神に立つて先づ第一に民衆の生活を重んじなければならぬ。

四

日本がかくの如き國民主義的態度を以て滿洲國を援助せんがためには、日本國民自身がこれにふさわしき覺悟を要する。こゝに何よりも反省しなければならぬことは所謂島國根性についてである。

大陸續きの支那と異なり海を以て圍まれ外冠を受けたことなく萬世一系の皇室を有し平和な生活を享けた日本人は、更に、乾燥して殆んど冬と夏とよりなる支那と異なつて潤い多く美しき四季の變化に富む自然に恵まれて、情緒豊かな文化を生み愛に富む生活を展開した。然も整然と纏まつた統一美をなせる島國に於て創造された日本文化には、廣大な自然に於て造られた支那文化に見られる雄大さが缺けて居る。即ち日本文化は質に於て秀れて居るに拘らず量に於て劣つて居

1) 本誌第三十四卷第六號拙稿『思想對策批判』第七三頁參照

る。このことは日本人の性格の缺點として所謂島國根性である。それ故日本の歴史は長いに拘らず未だ世界史時代なるものをつくつて居ない。愛に富む日本人が利己を原理とせる資本主義的世界時代より轉じて愛を原理とする國民主義的世界時代の指導者たることはふさわしいのであるが、而もその島國根性こそは日本國民の大使命を失敗せしめる恐れあるところのものである。日本は對外活動に於て從來もこの缺點を現したのであるが、今また滿洲問題についてその缺點を現らはしつゝある。自己の立場より性急に目前の利益を追及するその態度は、既に重大な失敗をもした。今にして根本的な反省をなし遠大な心事を以つて當らなければ日本は國民主義的世界使命遂行の第一歩としての滿洲問題に失敗し、日本の歴史は世界史時代を有せずして終ること、なるであらう。

而も日本人がこの久しきにわたる國民的缺點たる島國根性を清算すると云ふことは單に觀念によつてはなくこれにふさわしい實踐自體によつて初めて爲され得るのである。即ち今日の日本が當面せし大陸政策に於て國民主義的世界理想を有しこれに對して國民主義的實踐を爲すことによつて達し得られるのである。この意味に於て日本が滿洲に働かせることは同時に滿洲が日本に働かけ日本人を教養することとでなければならぬ。かく現代日本人が國民主義な大理想を抱くに至れば、こゝに日本の一切の文化は自ら雄大な發展を遂げ世界文化史に於て日本時代を作り得るに至るのである。かくて滿洲問題は日本にとつて世界史的國民となると否とを決する重大な試練

である。

この島國根性の克服のための第一歩として日本が先づ爲さねばならぬことは、滿洲に於ける治外法判權の徹廢である。今日益々多くの日本人は、滿洲國の各地に發展して多くの利益を受けながら彼等は滿洲國の法律に對する責任を負はないのである。この爲めに日本人が滿洲人に對し經濟上等に於ても不當なハンディキャプを有し且つ阿片の密賣等非人道的行爲が廣く公然の秘密として行はれる等多くの不合理が爲されつゝあることは、心ある人々が痛歎して居るところである。かくの如き偏狹な利己的な状態を固執する以上日本が滿洲に立派な國家の成立に協力すると云ふことは出來ない。一方滿洲國の裁判所自身を改善—日本の司法官が滿洲司法官になる等によつて—すると共に治外法權を速に徹廢しなければならぬ。新聞紙の報道によれば領事會議がその徹廢を決議したとのことであるが、それは極めて至當である。その速なる實行への眞面目な努力を期待して止まない。

其他日本が滿洲のためになすべき多くの事柄がある。私はこゝに只だ日本がその國民主義的世界使命の自覺より、島國根性をすて、眞面目な援助を與へ、日本的な國家の長所と支那的な社會の長所との融合により、滿洲の天地に新しい國民主義國家の建設されんことを衷心願ふものである。

以上に於て主として原理的な問題を論じた私は、更にこの基礎の上に具體的な問題を考察しなければならぬ。(昭和九年五月)

1) 「五族共和」と云ふも合理的な平等な條件の下に於ける自由な發展に基く適者生存を前提としなければならぬ。